様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２９８４

研究課題名（和文）古代詩学のキリスト教的変容―古代末期/ルネサンス期聖書叙事詩の文学史的研究

研究課題名（英文）Historical Study of Biblical Epic Poetry in Late Antiquity/Renaissance

研究代表者
上月　翔太（Kozuki, Shota）

愛媛大学・教育・学生支援機構・講師

研究者番号：９０８６０８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本課題における中心的な研究成果としては、古代末期の聖書叙事詩についてその作品構造、古典作品からの影響といった側面からの作品分析を行うことができた点である。ユウェンクス『福音書四巻』、セドゥリウス『復活祭の歌』、アラトル『使徒の物語』という新約聖書による聖書叙事詩について検討を行った。ラテン語叙事詩の重要な模範としてウェルギリウスが参照されるのは当然ながら、これらの聖書叙事詩にはそれ以外の詩人の影響（とりわけオウィディウス）が見られる他、いわゆる古典的な叙事詩とは異なる特徴を挙げることができた。成果の一部は一般書の一部として公刊され、聖書叙事詩に関する一般的な認知を高めることもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　以上の研究成果はまず国内における古典期以降のラテン語叙事詩の作品に対する認知の向上に貢献したことにある。いわゆる「異教的」な文化を代表する叙事詩という詩がキリスト教の主題をいかに取り入れ、変容していったのかを如実に示す聖書叙事詩は、古代末期の文学や文化を考える上で重要な作品群である。また、本課題の研究成果は初期近代におけるネオ・ラテンのラテン語叙事詩における聖書主題の取扱いについても扱い、古代末期の文学作品に関する受容の一端を明らかにすることもできた。

研究成果の概要（英文）：The central research achievement of this study lies in the analysis of Biblical epic poetry from the late antiquity period, focusing on aspects such as the structural composition of the works and their influences from classical literature. Specifically, examination was conducted on Biblical epic poetry from the New Testament, including Juvenal's "Evangeliorum Libri Quattuor," Sedulius's "Carmen Paschale," and Arator's "Historia Apostolica." While it is natural to reference Virgil as a significant model for Latin epic poetry, these Biblical epic poems exhibit influences from other poets, particularly Ovid, and also showcase distinctive features different from traditional classical epic poetry. Some of the findings have been published as part of general literature works, contributing to the broader understanding of Biblical epic poetry.

研究分野：西洋古典文学

キーワード：聖書叙事詩　古代末期　初期近代　ネオ・ラテン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

いわゆる古代ローマ期の作品に限定されることがほとんどであったラテン文学であるが、近年の国際的な潮流の中では、古典期以降の時代、つまり古代末期から中世、近代の作品にも、研究対象としての光が当てられている。専門研究機関の開設やハンドブック系の文献の出版といった形で、その研究の盛り上がりを知ることができる。しかしながら、日本国内においてこの流れは見られなかった。確かに哲学や宗教学といった領域では、古典期以降のラテン語文献を扱う研究は行われているが、申請者が専門とする文学においては、古典期以降のラテン語作品にはほとんど関心が寄せられず、国際的な潮流からは乖離している状況にある。国内においてはまず、この肥沃な研究領域である古典期以降のラテン語文学について、積極的にその成果を公にし、社会、あるいはアカデミズムの中で認知を求める必要がある。

本研究はその中でも聖書叙事詩と呼ばれる作品群に注目した。古代の叙事詩の韻律で聖書主題を扱った聖書叙事詩は、古代末期や初期近代といった古典期以降のラテン語文学の中でも相当の作品数を有している。国際的な古典期以降のラテン語文学への関心の高まりは、聖書叙事詩についても当てはまる。個別作家に関する研究著作や校訂版の出版は、充実しつつあると言える。こうした動向を踏まえ、これらの個別研究を統合する視点を提示する必要があると考えた。

本研究は古代末期に成立し、ルネサンス期に隆盛をみたラテン語による聖書叙事詩文学について、その成立と展開の過程を古代詩学の伝統とキリスト教の関係に注目し、描き出すことを試みるものである。

２．研究の目的

聖書叙事詩は、聖書に記載のある主題や物語を、「異教的古代」の叙事詩韻律に乗せて語った詩であることから、キリスト教とギリシア・ローマの（異教的）古代という西洋文化の根幹をなす二つの大文化の接点に成立した文学形式である。したがって聖書叙事詩において、西洋文化の根幹をなす、これら二つの文化の融和や競合の関係を見ることができる。

聖書叙事詩は、ホメロス以来の（異教的）古代文芸の伝統と、聖書やその註解、教父著作も含めたキリスト教テキスト文化双方の反映を受けた文学形式であることから、申請者はこれらの作品群の検証によって、古代詩学のキリスト教的変容が描けるものと判断した。この古代詩学のキリスト教的変容は、例えば古代の教父著作の多くが「異教徒反駁」のために、古代ギリシア・ローマ文学を否定していたことを考え合わすならば、聖書叙事詩という文学形式によってはじめて十分に論じることのできる問題であると、申請者は考える。

そして、本研究は文学史研究として、その対象範囲をルネサンス期の聖書叙事詩まで含めることで、この変容がルネサンス文学の創作においてどのように展開したのかについても新たな知見を提供することを可能にする。古代的表現と聖書主題の結びつきは、ルネサンス美術にはっきりと認められ、美術史をはじめとした研究も積極的に行われている一方で、ルネサンス文学研究においては「古代」と「キリスト教」の両者の関係という問題は、少数の作品（例えばダンテ『神曲』）やテーマ（例えば新プラトン主義との関係）に関連したものを除くと、十分に扱われているとはいえず、依然として開拓の余地ある領域だと言える。ルネサンス期に再び隆盛をみた聖書叙事詩は、キリスト教にも古代文芸にも深く通じた詩人によって書かれており、この問題を考える上で極めて有益な作品群である。

以上より、本研究は、古代詩学の伝統がいかにキリスト教文化の影響を受け、変容していったのかを古代末期とルネサンス期の二つの時代の創作実践を通じて描きだし、文学史研究における大きな不足を補うとともに、聖書叙事詩を通じて、「ギリシア・ローマ古代」と「キリスト教」を分断したものと捉える傾向のあるルネサンス文学研究に、新たな視野を提供するものである。

３．研究の方法

古代末期の３つの新約聖書叙事詩、ユウェンクス『福音書四巻』、セドゥリウス『復活祭の歌』、アラトル『使徒の物語』の作品分析を中心に研究を行った。作品分析においては、１）ラテン語叙事詩の重要なモデルであるウェルギリウスの作品の影響関係の検討、２）非ウェルギリウス的特徴の把握、３）３つの聖書叙事詩相互の関係性の検討を行った。加えて、聖書叙事詩が後代にいかに受容されたのかを検討するため、初期近代のラテン語キリスト教叙事詩であるヴィーダ『キリスト物語』と古代末期の聖書叙事詩の比較を行った。

１年目にはセドゥリウスによる聖書叙事詩『復活祭の歌』の特に第１歌の検討を行った。２年目は、聖書叙事詩の最初期にあたるユウェンクス『福音書四巻』と到達点といえるセドゥリウス『復活祭の歌』の比較から聖書叙事詩成立の過程を描くことを行った。３年目は以上の２作品に、アラトル『使徒の物語』を加えた分析を行い、先行する叙事詩のモデルについて検討した。４年目には、古代末期の聖書叙事詩の伝統が、初期近代のネオラテンによる聖書叙事詩にいかに継承されたのかという問題に迫るために、「ラザルスの復活」という聖書における重要な奇跡の場面を対象に、古代末期のユウェンクス『福音書四巻』、セドゥリウス『復活祭の歌』と初期近代のヴィーダ『キリスト物語』の当該場面の比較を行った。

４．研究成果

以上の研究より得られた知見は大きくまとめると以下の 4 点となる。

第 1 に古代末期聖書叙事詩のもつ教訓詩的性質である。いずれの聖書叙事詩もイエスの行為や語りを描きながら、その教えを強調することを中心的に行っていたことが指摘される。このことはウェルギリウスの教訓詩『農耕詩』の表現の援用をはじめとした、先行作品の受容からもうかがわれる。

第 2 に 3 つの古代末期聖書叙事詩が先行する聖書叙事詩を念頭におきながら、新しい表現を志向している点も指摘された。セドゥリウスは序において先行するユウェンクスとの違いを強調し、そのセドゥリウスの叙事詩を継承する形でアラトルは使徒の物語を歌い始めた。これらの詩人が聖書叙事詩としての伝統を形成することを明確に意識していたことがわかる。

第 3 にウェルギリウス以外にも聖書叙事詩のモデルとなるべき詩人が存在していたことが指摘される。ルーカーヌスやオウィディウスといった詩人の叙事詩が聖書叙事詩のモデルとして位置づいていた可能性がある。

第 4 に初期近代のラテン語文学における古代末期の作品の影響の可能性を指摘した点である。一般に初期近代のラテン語文学は古代の作品と直接検討をされがちであるが、古代末期や中世の諸作品といった媒介を想定することで、需要をより実質的に描くことができる。特に初期近代のキリスト教叙事詩にみられた、詩を通じた宗教的な教化といった側面は、古代末期の諸作品の影響とみることができる。

以上のように作品理解を深めたのみならず、日本国内に古典期以降のラテン語文学について広く発信することも可能となった。今後の研究の基盤を形成するのにいくらか貢献ができたものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 上月翔太
２．発表標題 古代末期聖書叙事詩における叙事詩観の変容
３．学会等名 美学会第73回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 上月翔太
２．発表標題 ホメロス・ウェルギリウス・ダヴィデ―聖書叙事詩の成立と展開
３．学会等名 文芸学研究会第67回研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 上月翔太
２．発表標題 6世紀の聖書叙事詩Historia Apostolicaにはなぜ序がないのか
３．学会等名 第33回待兼山芸術学会研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 上月翔太
２．発表標題 聖書叙事詩という伝統―ラザルス復活場面の比較から
３．学会等名 日本西洋古典学会第73回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 清川祥恵，南郷晃子，植朗子，野谷啓二，上月翔太，田口武史，里中俊介，山下久夫，斎藤英喜，藤巻和宏，鈴木正崇，平藤喜久子，横道誠，庄子大亮，Jose Luis，Escalona Victoria，鋤柄史子	４．発行年 2022年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 367
３．書名 人はなぜ神話＜ミュトス＞を語るのか―拡大する世界と＜地＞の物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関